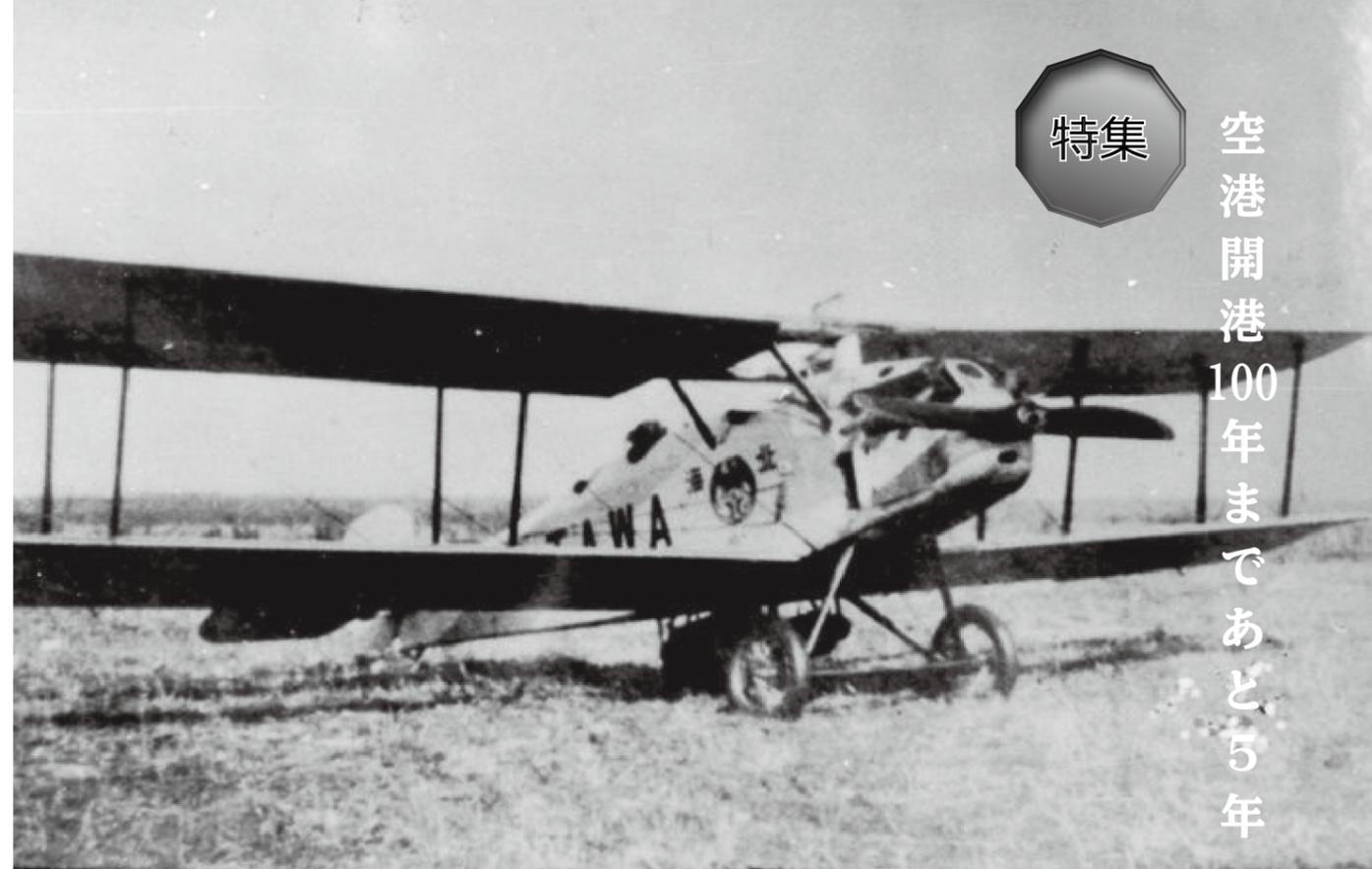


はじめて飛行機が着陸したあの日から



千歳にはじめて飛来した飛行機「北海」第1号/小樽新聞社（現 北海道新聞社）社用機/大正15年10月22日飛来



新千歳空港は、年間2400万人以上（令和元年実績）が利用する北海道の空の玄関口として、千歳のまちとともに発展を続けています。

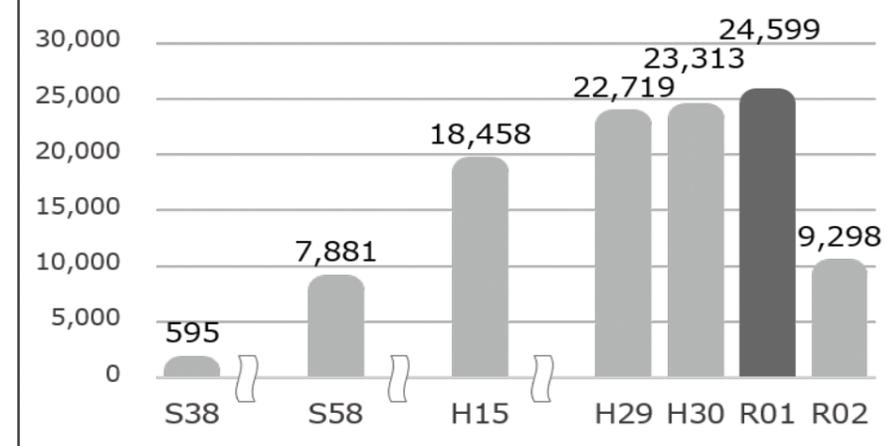
大正15年、当時の千歳村民が総出で原野に一本の着陸場を造り、小樽新聞社（現在の北海道新聞社）所有の「北海」第1号が同年10月22日に着陸しました。

千歳における空港のはじまりです。

今月の22日で、先人たちの偉業から95年を迎えます。

今月の特集では、あと5年に迫る空港開港100年に向けて、空港のはじまりなどを紹介します。

新千歳空港乗降客数の推移（千人）



※ R02の乗降客数は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により減少しています。

千歳空港のはじまり

《千歳に飛行場を》

明治末期に日本の空を飛ぶようになった飛行機は、大正初期には北海道の空でも飛ぶようになりました。

しかし、当時の人々にとつて《飛行場》の概念はなく、飛行機は速度が速いだけの危険な乗り物と思われていました。

大正初期の千歳村は、人口が4千人程度の寒村で、樽前山の度重なる噴火による火山灰・火山礫に覆われ、土地は痩せ、農業には適さない地域でした。この広大な火山灰地をなんとか利用する道はないかと語り合い、当時としては珍しい《飛行場》にできないかと夢を思い描いた3人の村民がいまいた。

千歳村長の山田旦、千歳郵便局長の中川種次郎（初代名誉市民）、千歳村議会議員の渡部栄蔵（山三ふじやグループ創業者）です。（敬称略）

《村民たちによるおもてなし》

夢の語らいから10年ほど経った大正15年（1926年）8月、私鉄北海道鉄道の札幌線（苗穂⇨沼ノ端）が開通し、千歳村に駅が建設されました。



開業当時の千歳駅

間もなくして、新しく開通した鉄道を利用して、小樽新聞社（現在の北海道新聞社）が、10月に千歳村で「ふ化場見学会」を催すことになり、千歳村に昼食の応援を依頼しました。

これを受け、千歳村は山ぶどう酒、馬れいしょ、三平汁などで《おもてなし》をすることにしたところ、新聞社は感激し、お礼として、訪問当日、汽車が千歳駅に到着する時間に合わせて、社が所有する飛行機を飛ばし、空から宣伝ビラを撒くという提案をしました。

《着陸場の建設》

飛行機が興行の対象であった当時、多くの村民が実物の飛行機を見たことがなかったため、千歳村は、上空に飛行機を飛ばすのであれば、着陸して間近で見せてほしいと新聞社に頼みました。

着陸に適した土地がなかったため、はじめは断られましたが、千歳村の熱心な申出により、新聞社が着陸する場所を探したところ、整地すれば使える場所が見つかりました。

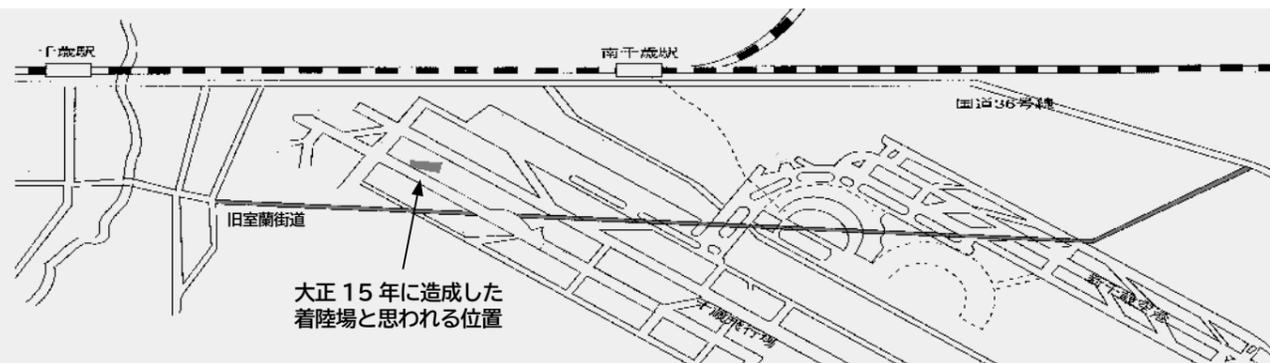
その場所こそ、千歳開拓の夢を思い描いた3人が話し合った場所だったので、千歳村では早速、村民大会を開き、次のユニークな提案が決議されました。

「もし札幌へ活動写真（映画）を見に行くとすれば、自動車料金の往復に昼食を加えれば1回3円はかかる。1日の出費（日当）が1円20銭として2日、1戸から一人整地作業をしてくれれば珍しい飛行機を見ることができ、着陸場を造成するか否か。」（※新千歳市史（上巻）第4編第4章より抜粋）

話し合いの結果、全会一致で村民たち自らの手で着陸場を造成することを決定しました。大人も子どもも一緒になって手に《くわ》や《すき》を持ち、村民総出で抜根と整地を行いました。そして、わずか2日間で、長さ110間（約200m）、幅60間（約110m）の着陸場が完成したのです。

《当時の着陸場の位置》

着陸場造成時の記録が少ないため、95年経った今でも正確な位置は特定されていません。諸説ありますが、現在は、航空自衛隊千歳基地・西側滑走路北端と言われています。



《空港の歴史を感じられる場所》



《空港公園》
航空思想の普及啓発と空港の歴史を継承する公園として、平成20年4月、オフィス・アルカディア地区内に「空港公園」を整備しました。公園中央には、村民総出で造成した着陸場をイメージし、約4分の1に縮尺した広場を設け、周囲には、「北海」第1号と酒井憲次郎飛行士のモニュメント、村民顕彰の碑が配置されています。

空港公園／柏台南1丁目5
※入園無料・駐車場有



「北海」第1号原寸大模型 (W12m × L8m × H3m)

《蘇る「北海」第1号》

村民総出の着陸場造りという、千歳の発展のきっかけとなった出来事の特徴である「北海」第1号は、平成4年の新千歳空港ターミナルビル供用開始を機に、画家の本間武男氏により原寸大模型として復元され、ターミナルビル内に展示されました。

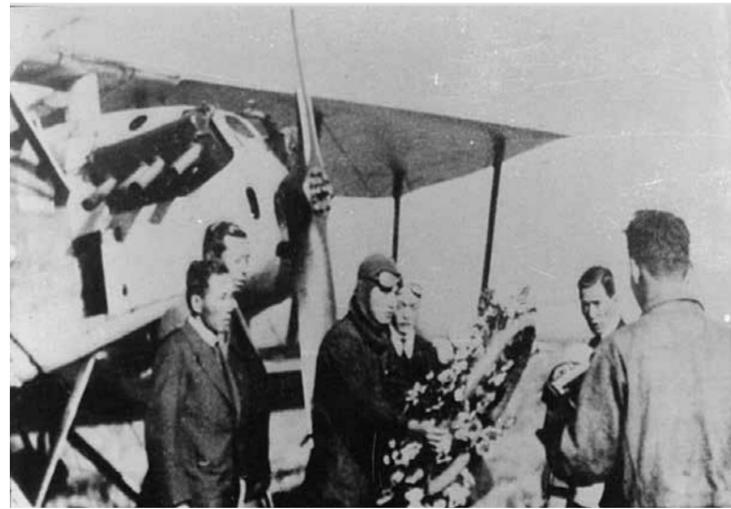
現在は、「名水ふれあい公園」内の蘭越浄水場管理棟1階「水道情報館」に展示しており、自由に見学することが出来ます。

水道情報館／蘭越4番地
開園期間 4月第4土曜日～11月15日
開園時間 9時～18時(9月30日まで)
9時～17時(10月1日から)
※入園無料・駐車場有

《「北海」第1号の着陸》

大正15年10月22日、着陸場には、飛行機を見たいという千歳村民のほか、恵庭や北広島、苫小牧などから、1万人近い人々が訪れました。当時の千歳村の人口が約5千人であったことから、世間の関心がいかに高かったかが伺えます。

午後1時過ぎ、小樽新聞社



千歳に着陸し大花輪を受け取る酒井憲次郎飛行士

の社用機「北海」第1号(操縦は、同社航空部の酒井憲次郎飛行士)は、北西方向から千歳村へ飛来しました。着陸場上空では、観衆に伝えるかのように旋回しながら、新聞社の宣伝ビラを撒いた後、ま



酒井 憲次郎氏

千歳にはじめて降り立った「北海」第1号飛行士

昭和7年 (1932)	昭和2年 (1927)	大正15年 (1926)	明治36年 (1903)
9月、満州国調印式典写真を大阪に輸送中、日本海沖に不時着水し殉職。29歳	1月、朝日新聞社航空部入社	10月22日、千歳村に「北海」第1号を操縦し飛来(同年末に退社)	7月4日 新潟県に生まれる

飛行機を間近で見たいという強い思いから、村民総出の勤労奉仕で造り上げた着陸場―ことに当たり、一致団結する千歳の人々の心意気は「スピリット・オブ・チトセ」と評価され、現代に脈々と受け継がれています。

千歳における空港の歴史は、ここからはじまったのです。

《民間航空再開70年》

空港開港95年の今年は、民間航空再開から70年の節目の年でもあります。

はじまりは、昭和9年、当時の千歳村に民間用として新千歳空港の前身である千歳飛行場が開場されました。

昭和14年に海軍航空隊の基地として利用されると千歳村は大きく成長を続けました。

第2次世界大戦に参戦すると、千歳飛行場は北海道の空の基地として重要な役割を持つようになりましたが、日本が戦争に敗れると米軍が進駐し、米空軍戦闘機部隊に使用され、しばらく日本人が触れることはできませんでした。

そのような中、昭和26年の平和条約発効を前に日本の空が日本に戻ることとなり、丘珠との競願・誘致合戦の結果、千歳における民間航空が再開されました。現在の新千歳空港に至るまで、何度も姿を変え、発展を続けています。



民間航空再開に沸く千歳町民

《空港開港100年へ》

着陸場を夢見た先人たちによる偉業が実を結び、千歳のまちは、空港の発展とともに大きく成長してきました。

私たちは、先人の偉業を地域の誇りとしてたえ、空港とまちが育んできた歴史を未来へとつないでいくことが大切です。

市民や企業、空港関係者などが一体となって、5年後に迎える空港開港100年への思いを寄せながら、千歳市総出で新千歳空港を核としたまちの発展をさらに進めていきたいと思います。

《「北海」第1号に関する情報を探っています》

《型式》三菱式R2・2
海軍一〇式二号艦上偵察機を民間練習機に改造したものの《製造》三菱内燃機製造社
※公式ツイッターへどんな内容でも情報をお寄せください。

【詳細】

空港政策課
空港調整係
☎(24) 0467
☎(22) 8852



令和2年
国際線ターミナルビル拡張後の新千歳空港
北海道エアポート(株)提供



平成22年
国際線ターミナルビル完成後の新千歳空港



昭和55年
空港駅連絡歩道橋供用開始時のターミナルビル



昭和38年
旧千歳空港ターミナルビル



昭和26年頃
民間航空再開時のターミナルビル



昭和10年頃
陸軍飛行隊誘致のため拡張した飛行場

千歳空港のうつりかわり